文芸

俳句

透けて見ゆ人の生き方秋簾　池田　逸子

秋夕焼座敷に集め旅支度　伊藤　敬子

夜勤終え闇の深さや身に沁みる　伊藤　定男

真白きファーストシューズ落葉踏む　今関満喜子

思い出を酒の肴と長き夜　魚地　照子

どんぐりは風の落し子またひとつ　江森　悦子

身に沁みる介護生活ありがたき　大谷　武彦

農小屋に逆さ吊りされ唐辛子　川島　孝夫

身に入むや昔庄屋の荒屋敷　川島　通則

赤蜻蛉ゴルフ帽子に止まりけり　向後　寛

身にしむや見送る真夜の救急車　越川せつ子

焼芋の売り声遠く暮るる街　越川　福子

曼珠沙華不気味にさいた土手の上　小松　藤男

捨て稲架やローカル線は風の中　佐瀬　輝夫

身に入むや余生一日づつ狭まる　鈴木とし子

言の葉の言い過ぎし事しむ身かな　鈴木　利子

茶の花や編笠かくす薄化粧　玉虫　栗扇

朝寒や一椀の湯気和みゆく　土屋美枝子

小春日へ気迫の一打響きゆく　土屋　義昭

穭田や二番穂みどり稔るなり　戸村　静華

ふるさとの山肌は今夢紅葉　西崎さち子

スタンドの光のなかの柿を描く　早川　勇

短歌

さんぱ道川向こうより流れ来る
運動会の子等の喚声　平山　芳子

木犀の花の香りに誘はれ
遠回りする散歩の小道　八角　三枝

墓の辺をあまた飛び交ふ赤蜻蛉
夫の墓石に止まるもねつ　鈴木まさ子

あまりにも手広すぎると畑に立ち
胸の奥所の息を吐きたり　青木　秀子

亡き夫に語りかけつつ供花に切る
花魁草は思ひ出の花　吉岡　信子

常日頃近寄りがたき柊の
花咲き妙なる匂ひ放てり　押尾　輝子

適ふなら亡夫と交信したかりし
オリオン星座見つつ思ひぬ　田崎　尚美

八ッ場ダムの湖底になるとふ川原に
ニセアカシアの一本が立つ　西山満里子

音もなく金木犀散る夕べ
逝きたる亡夫を思ひねるなり　芹川　初子

月毎に避難訓練始めねつ
被災地旭の小学校は　島田ますみ

返り咲く桜の花の幽きを
足止め見上ぐ買い物帰り　斉藤つね子

永遠の眠りにつくと思うなら
せまり来る死に恐るることなし　鈴木　益郎

予後の歩を転ばぬようにゆったりと
生きいる今の幸せ想う　高梨　キヨ

式部の実あまたこぼれて狭庭辺の
地を敷きつめて秋深みゆく　土屋　好

思い出をたぐり寄せれば古希すぎて
不惑の土依いまだぐられず　越川　義則

こうほう博物館 45

田下駄

木の板の周りを四角く組んだ物に、紐が三角に付いている。これは田下駄と言って、昔、田圃に素足で入る際に、足をとられたり潜ってしまうのを防ぐために付けた農具である。ところが町に寄贈された田下駄には、大きな物と小さな物とがあり、町内の詳しい方に聞いたら、小さな物が普通の田下駄で、大きな物は稲の苗を作る苗代を整地するときに使われたのだという。この田下駄は、鳥喰新田の方から寄贈されたということである。

鳥喰には、今でこそ広々と水田が広がっているが、ほんの百年ほど前は葦が生い茂る鳥喰沼と呼ばれる湿地が、鳥喰新田とJR総武本線線路との間に広がっていたと言われる。そこを干拓して水田にしたのが、大正時代から昭和の初め頃であった。しかし、もともとは沼であったため、軟弱な地盤であり、水田に入ると足が潜って仕事にならない。そこで考え出されたのが、ここに紹介した田下駄である。ただでさえ水田に入るのは楽ではなかったとはいえ、これを付けて田植えや稲刈りをしたことを思うと、大変な重労働であったことが想像される。現代ではトラクターやコンバインを使っての農作業がほとんどを占め、昔に比べれば格段に楽になった。しかし、こうした昔の農具を見て、その昔の農作業の大変さを考え直してみるのもいいのではないか。

この昔の農作業や年中行事を、スケッチブックに描いた「小椰慎　ふるさとの歳時記」展を今月十日から、町民ギャラリーで開催します。

▲普通の田下駄